教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済
©1984 精道教育促進協会 ㊫(芦屋)三二・三四五二 芦屋市船戸町12—6

医学倫理と人間の尊厳

遺伝子操作は危険……世界医師会のメンバーとの謁見

医師と人間の権利

ベニス大会でのテーマ、『医師と人間の権利』は、教皇庁の関心を集めました。

奪うことのできない根本的な人間の権利について、国連総会(一九七九年十月二日No.13)より以前においても、幾度もお話してきました。こうした諸権利の総体は人間の尊厳そのものをなすと考えられます。特に医師はこれら諸権利と深いかかわりをもっています。生まれる権利と生存権は第一にして根本的な権利であり、いわば他のすべての権利の根源であります。同様の意味で、「健康の権利」、つまり健康を保つために最良の状態を得る権利を考えることもできるでしょう。さらに、正常な肉体をもつ権利や職務上の秘密尊重、できることなら自由に医者を選び診てもらう権利などを思いうかべることもできます。

いま申しあげたような権利は、変わりゆく社会の法律によって認められたものではありません。基本的な原理に根ざしたもの、存在そのものに基をおくゆえ、決して変わることのない道徳法に根ざしたものです。医学倫理は、特に今日、医学の最も弱い分野のように思われます。しかし、医学倫理こそは最も大切な分野であって、開業医が医薬実践の規範とみなすべきもの、この上なく注目すべき点ですから、最大の努力を傾けてこれを擁護しなければなりません。

医学とは何か

医学は異常な速さで進歩していますから、どうしても医学倫理を度々考えなおす必要があります。皆さんは、興味をそそる問題ではあるが、同時に大変微妙なこの新しい問題に直面しておられます。この点については、教会も同じであり、みなさん方の責任感あふれる考察を支持したいと思っております。

ところで、倫理面で満足すべき見解を得ることができるかどうかは、そもそも医学とは何であるか、にかかっています。根本的に大切なのは、医学が実際に人間の役に立っているかどうか、人間の尊厳と人間のユニークで卓越した本性に役立っているかどうか、あるいは医学が、健康にだけ役立って、病者の世話はあと回しになっているのではないか、という点です。ヒポクラテスの時代から、医学倫理とはつねに人間の尊厳を尊び守ることを旨とするとされてきました。ここで問題となっているのは、伝統的な医学倫理を保持するという問題にとどまりません。いつの時代にかかわりなく、医学本来のあり方をまもるか否かの問題なのです。医学は明日の人間を護らなければなりません。人間とは権利と義務の主体であり、たとえ社会の善のためと言えども道具として利用することのゆるされない存在であります。従って、その人間を尊重することができるか否か、これが医学倫理の重大点なのです。

生命を守る

重要と思われますことを二、三とりあげてみましょう。私がのべる確信は、カトリック教会が抱いている確信であり、私はその教会から全世界の牧者としての役目を負わされています。人間は神の似姿に造られ、キリストによって贖われ、永遠の生命へとまねかれている、これがその確信です。このことは、聖書を神のお言葉として受け入れ、信じる人にとっては当然なことがらであります。けれども、こうした確信により人間尊重の態度が生まれるという事実をみれば、善意ある人ならだれもが耳を傾け、人間の条件について熟考し、人間の生命と尊厳と自由を脅かすものはどんな犠牲を払ってでも排除しようと努力なさることでしょう。

まず第一に生命に対する尊敬。(…) 一九四八年ジュネーブのWMA大会で採用され、特筆大書されたその内容は次の通りです。「私はたとえ脅迫されようとも、人間の生命をその受胎の瞬間から、畏敬の念をもって尊重します。私は自分の医学知識を人道に反することに使うことを決して認めません。」 この厳粛な誓約が医師の行動指針であり続けるようねがっています。問題は医師が信頼に値するかどうかです。たとえば妊娠中絶とか安楽死のように民法で容認されている場合であっても、医師自身の道義心が問題となります。みなさん方に期待されているのは、生命に逆らうあらゆる病気に対抗してくださることです。けれども、私たちが支配権をもたない、この上なく偉大な善である生命そのものを犠牲にしてはなりません。人間の生命の主人は神御一人だけですから。(…)

人間良心の問題

ベニス大会でとりあげられた非常に重要なテーマはもう一つあります。医学の数々の新しい可能性に直面した場合の人間の諸権利についてです。特に遺伝子操作の可能性は、個個の人間の良心に重要な問題を投げかけています。実際このような操作は、人間がもつ生得の尊厳と犯すことのできない自立性に照らし合わせるとき、どのように考えることができるでしょうか。

■みなさん方に期待されているのは、生命に逆らうあらゆる病気に対抗してくださることです。けれども、私たちが支配権をもたない、この上なく偉大な善である生命そのものを犠牲にしてはなりません。

たとえば、染色体の欠陥から生じる種々な病気を治療することをはっきりと目的にした厳密な意味での治療であれば、人の幸せを本当にますためであって、人間の本来の姿を侵害したり健康状態を一層悪化させないかぎり、原則として望ましいものと考えられるでしょう。このような介入ならキリスト教の倫理的伝統の線上にあります。一九八二年十月二十三日の教皇庁科学アカデミーで申しあげたとおりです。(AAS 75[1983], Pars I, pp.37−38)

けれどもここで問題はもとに戻ります。厳密な意味での治療の限界をこえる遺伝子操作が倫理的にみて同じように受け容れられるものかどうかは、まことに大きな関心の的になります。これに答えるためには、幾つかの条件を顧慮しなければなりませんし、ある前提を受け入れなければなりません。その点をいくつか思いだしてみましょう。

人間本来の姿を保護すること

人それぞれのもつ生物学的性質はその人の生涯の全行程を通して、その人自身を成立させる条件となるものであって、手を触れてはならないものです。人間は、一人ひとりが実に独特の特徴をもっており、霊魂だけでなく、肉体をも備えています。こうして、肉体において、また肉体を通して、その人自身の特異な実在にふれるわけです。人間の尊厳を守ることは、すなわち、心と体とから成る人間の本質を守ることになります。(『現代世界憲章』14)　たとえば、人間の生物的条件を改善することを目指したような厳密には治療のための介入とは言えない場合、決断を下すための基準は人間観を土台としなければなりません。

とりわけ、この種の介入は人間の生命の起源を侵害してはならないのです。結婚の絆で結ばれた親の生物的霊的一致、つまり生殖の面を侵害するようなことがあってはなりません。従って、自由の土台となる人間の基本的尊厳と生物としてもつ共通の性質は尊重すべきであって、遺伝子修正したり、異種の人間群を造ろうとするがごとき操作は避けなければならないのです。

生命、この最高の善

なおまた、いま取り上げているこの種の介入の底にある姿勢が、現実には人間を格下げすることになる人種差別指向や唯物的な考え方をもとにすることも許されません。人間の尊厳は、生物としてのレベルを超越したものであるからです。

遺伝子操作は、生命を単なる対象にすると、恣意的かつ不法なものとなります。限りあるとは言え、とにかく知性と自由をそなえ、当然尊ぶべき人間が対象であることを忘れるようであれば、遺伝子操作は不正なわざとなり、認めるわけにはゆかないのです。あるいはまた、人間の尊厳を侵害する危険を冒し、人間という全体的な存在に立脚していない規準に従って操作するならば、同様に恣意的不法行為と言わねばなりません。この場合には、個々の人間を他人の気まぐれに曝すのですから、人間が自主性を失うことになるのです。

いかなる科学と技術の進歩も、人間の尊厳を保護する道徳的価値に対しては最大級の敬意を払わねばなりません。医学からみると、生命が人間の最高にして最も根本的な善ですから、当然何をさしおいても守るべき原理があります。すなわち、まず第一に有害なものすべてに反対し、それから善なるものを探究する、これであります。(十月二十九日　ワールド・メディカル・アソシエイションにて)

同じことをここウィーンでも皆さんに繰り返し申し上げたいと思います。実に人間こそは、全ての学問や芸術を結びつけるテーマであります。報道機関は、個々の人間を相互に結びつけるためのものです。

また、個人として、さらに人間であり神の子である者の共同体メンバーとして、人間は教会のテーマでもあります。それゆえ私は、回勅『人間の贖い主』で次のように述べました。「この人間は、自分の使命を果たすにあたって教会が進まねばならない第一の道なのです。この人間は教会にとって第一の主たる道であり、キリストによってつながりをもち、託身と贖いの秘義を通して変わることなく導く道です。」(14番)

教会は、人間は神の似姿であり、永遠の命を神のうちにもつと、その信条を大胆に告白します。

人間の進歩

以上述べたことは、これから考察しようとする簡単な考え方の背景となるでしょう。すべての学問は、人間について人間のためである時にのみ完成したものとなります。このことは確かに神学にもあてはまります。なぜなら、創造主に焦点を合わせ、人間を超える観点から考察してゆくからです。

すべての学問は、人間についてである時にのみ完成したものとなる

科学、芸術、信仰

もし、みなさんにお会いできるこの機会を逸していたら、私のオーストリア訪問は重要な要素を欠いてしまうことになったでしょう。みなさんのお国は、複雑だが実り多い科学・芸術の文化交流において、幾世紀もの間すばらしい貢献をして来ました。そしてさらに、この豊かな遺産に加えて、現代と未来のための協力を惜しまず続けておられます。オーストリア、またヨーロッパでは、学問と芸術の歴史が、さまざまな形をとって教会と信仰の歴史に結びついています。両者の関係は時折、種種の紛争でかき乱されたり断ち切られたりしました。しかし、両者の協力によって多くの前向きな結論が引き出されたことは否めません。教会には、学問・芸術と人類の善に関する新しい対話を試みるために障害となるものなどありえないのです。

人間の役目に創造力を

それはそれとして、おのおの活動分野が異なるとは言っても、私たちの間には、人々と人類社会のための心遣いに熱意と希望を燃やしているという、一つの接点があります。そして、人間の将来が根本的に危機に瀕している歴史的情況下での仕事に勤しんでいる点でも同じことです。このような時機には、いつにもまして、善意ある創造的な人々と善意ある思想家たちが、力を合わせて人間や人類社会の破局を食い止めるべく努力を傾けなければなりません。

神の似姿

三年前パリのユネスコ本部で、そこに集う人類文化の責任者の方々に申し上げました。「ここに人間がいる」、さらに、「人間をまさに人間として愛さねばならない」と。

説教・講話・書簡等の抄訳

あらゆる分野の科学が絶えず専門化された結果、数々の発見と進展とを促し、人々は人間の精神に驚嘆し、信者は創造主を称えるようになります。さらに科学進歩を実用化したことは、人間の生活情況を広い範囲に好転させました。これらは飢饉や苦痛に対する戦いを見ることによっても充分納得できることです。

活動にあたって諸々の価値から独立し、諸諸の価値に対して中立を保っているなら、個人の利益を無視すべき研究にあっては、純粋さを維持することができます。ただし、否定してはならない道徳の価値を無視するほど、独立・中立の態度を絶対化することはゆるされません。

どのような活動にあっても、学問的活動とその実用化となれば、どうしても二つの価値の板ばさみにならざるを得ません。人間はみずからが生み出したものに脅かされています。広島の悲劇に言及しながら物理学者ハコブ・ロベルト・オッペンハイメル氏は言っておられます、「物理学者たちは罪を知った」と。

罪

人類史上に重くのしかかっている核の脅威と、技術変革のもたらした生態学上の問題(環境問題)を目のあたりにして、科学や技術を懐疑的に見る人々が多く、なかには、それらを否定してしまう人もいます。しかし、科学やその結果である技術を放棄したとて問題の解決にはなりません。解決策はただ一つ、それらを続けて、両者にもっと力をそそぐことです。ただし、人間を基準として考えなければなりません。人間を脅かしているのは、科学そのものでも技術そのものでもなく、それらが道徳的規準を無視して使われているという事実なのですから。

哲学的宗教的諸価値

神の似姿である人間にとって、学問と技術の支配者として、またその目的として自らの立場を取り戻し、精神と手のわざが人間たちを破滅させないよう努力すべき時がきています。それゆえ、科学と技術、政治は、人類全体に対すると同様に、かけがえのない個々の人間に関わる問題をも提起すべきです。この種の問題を無視したがために科学が進歩したとも言うことができるでしょう。この問題はとりもなおさず、哲学・宗教についての問題であって、科学や技術的活動の意義、限界、優先権、制限に関係があります。とはいえ、哲学・宗教の問題が、真理探究や基礎研究に外部から不当な限界や規制を加えることになってはいけません。これらの問題は、人間に対する神の問いかけとして、聖書の始めに書かれてあります。「アダム、どこにいるのか」、「カイン、あなたの弟はどこにいるのか」。このような質問に対してどの程度敏感に答えるかは、大部分の場合、人文系の学問にかかっています。これは、パリのカトリック研究所の演説で強調した点ですが、現代において最も重要な問題だと思われます。私たちの前途は洋々たる広がりをもっています。けれども同時に、懐(ふところ)に限界をも含んでいるのです。

科学を操作してはならない

科学者の間でこの種の問題提起が増し、お互いに提携していることは頼もしい限りです。国境や陣営の枠を越え、国際的な学術共同体が形成され、遺伝子操作や生物実験、化学、細菌、核兵器の完成などによってもたらされる危険と、袂(たもと)を分かつ人たちが増えてきています。一九八二年九月に、世界中から五十八人の科学者たちが、教皇庁学術院会合に集まったこともその一例です。集いを終えるに当たり、核戦争防止の可能性について声明を発表しました。

生命の保護

人間とその世界、すなわち最初の宇宙旅行で青と緑の惑星であると報道された地球は、保存と開発が、同時に行なわれなければなりません。それには、無生物を含んでいる全ての自然界にわたり、生命に対する細やかな配慮を尽くす必要が生じてきます。生命とは、無制限に開発できる埋蔵品ではなく、創造の秘義の一部分です。それゆえ、活用のみを考えずに感嘆と畏敬の念をもって対処しなければなりません。

創造のわざと芸術

感嘆することができると、大方の人々に忘れられがちである神の創造になる自然と出会う道が開かれ、同時に、創造的な力をもつ人間のわざとしての芸術にも道が開かれます。ザルツブルグ大音楽祭の創始者の一人であるマックス・ラインハルト氏は、芸術は生命維持のための食物、つまり、人間生命の進展のためにはひとつの条件だと言いました。詩人リルケは、芸術や音楽は、人々を夢中にさせ、慰め、助ける、と言っていました。人間を助ける、これは芸術とは何であるかを示す美しい言葉です。これこそは芸術にとっての素晴らしい仕事なのです。しかし、芸術がこの使命に応え得るのは、ただただ芸術の自由が人間的なものにつながっているときにかぎられます。人間の側から言うと、芸術の偉大さが姿をあらわし、希望と危険の両方を与えるのは、人間のあこがれであり、それを満たしうる、神という「地平線上」に芸術作品をながめるときだけです。世界と生命を解釈し、各時代を照らし、存在の高さと深さとの有用性だけを考えず、人間が自らに対決するためには、個人であれ社会であれ、芸術が必要となります。文学や詩も同様に必要です。滋味ゆたかで預言的かつ皮肉な言葉は、往々にして孤独と苦痛のうちに練り上げられたものです。ベートーベンの深い考え方によると、芸術家はある程度においては司祭的な奉仕をするよう招かれていると言えるのです。

教会と芸術

教会が芸術を必要とするのは、ただ教会に役立てるためではなく、人間のあらゆる面、その栄光と敗北を一層深く理解するためです。さらに、福音宣教の対象である人々をより深く知るためにも芸術は欠かせません。

教会は特に典礼のために芸術を必要とします。典礼とは、建築や彫刻、音楽や詩などのような創作活動のすべての分野にわたって、信仰の光を受けた芸術作品でなければなりません。世の終わりとのつながりを見ると、典礼は、黙示録で芸術的に表現された永遠の都の光栄と賛歌にあずかることをめざしています。長い人類の歴史において痛ましくもたびたび離れてしまった善と美とが、その都で永遠にひとつとなるのです。

アルベルト・アインシュタイン氏のことばを借りれば、真(まこと)の芸術と真の学問のあるところには必ず神秘がある、ということです。宗教と教会は、この神秘の深みに入りこんで、芸術と学問とを一つにつなぎあわせるのです。

しばしば、芸術の終点は近いとか、もうすでに終わったとか言われます。そして同じことが、哲学や教会についても言われています。しかし私としては、芸術が無尽蔵とも言うべき表現方法をもっていることをかたく信じております。「神はご自分に似せて人間を造り給うた。」(創世の書1・27)　それゆえに、人間の精神と夢には限りがないと言えますから。芸術と教会とは、わずかながら対話をはじめています。おそらく時間はかかるでしょう。しかし、いつの日か芸術作品が、信者、未信者を問わず、人々の目と耳、そして心を、新しい方法で開くときが来ると思うのです。

情報伝達の手段

不変の教え

司祭の生活は愛の奉仕

新聞記者として人々のために働いていらっしゃる皆さんにお話したいと思います。みなさん方の仕事はミーディエーション(仲介)です。それゆえ道具はミーディアム(手段)と呼ばれます。今回の旅行中もそうですが、教会の声をより多くの人々に伝えることができるのは、みなさん方のおかげです。その仕事に期待するとともに、それらを必要としている大勢の人々にかわってお願いします。遠く離れた地方を国境を越えてむすぶかけ橋となってください。この観点からみるとお国には特別の可能性があるのです。それは、人類とその社会を単に公平な観察者としてながめているだけでなく、よりよい方向へ向かわせるものとして、つまり、希望あるまなざしで見てやることです。暗いニュースをどんどん伝えるのなら、明るい出来事もまた同じ程度の関心をもってますます伝えてください。そうすれば、不幸な出来事のなかにも善が含まれていることを表示することができるでしょう。

イエズス・キリスト

「みよ、この人を。」　この言葉をもって、学者、芸術家、新聞記者の方々にお話した断片的な考察のまとめとしたいと思います。無関心であったり、聞き逃したりすることはできません。人間は、希望し、愛し、恐れを抱き、苦しみ、悲しむものです。その人間の弁護者となり、世界を守ってください。美しい地球は多くの危険にさらされています。

お仕事を進めるにあたり、「みよ、この人を」と示された御方を注視する教会の願いに耳をかたむけてください。

神であり、人の子であらせられるイエズス・キリストこそ、完成された人類への道であり、目標です。みなさん方を通して、大勢の人々が、ふたたびイエズスを見つけることのできますように。(一九八三・九・十二　オーストリアで、科学者、芸術家、新聞記者への話)

(…)司祭のみなさん、私はキリストのみ教えに従って、以前より苦しみに耐えている教会の司祭であるみなさんのところへ、兄弟(マテオ23・8参照)、友(ヨハネ15・14～15参照)、またキリストのご受難の証人(ペトロ①5・1参照)として、まいりました。

一人ひとりと名を呼び合って挨拶をかわし、経験に耳を傾け、みなさんが神の民の間でくりひろげておられる聖務の場、農業その他の労働にいそしむ人々の住む街や村に、一人ひとりの方と一緒に行くことができたなら、と思っています。とりわけ、私の深い愛情とみなさんの司祭としての証しに対する全教会の感謝を表明すると共に、たとえ困難のうちにあっても忠実を保ち通す勇気をおもちくださるようお願いいたします。

短いながらもすこぶる密度の高い司祭の集まりを機会に、ご一緒にいくつかの点を考えてみたいと思います。司祭職の本質および今ここでお持ちの使命を果たす約束について確認したいのです。

私たちが司祭としての生活を続けるには、按手(ティモテオ②1・6参照)によって受けた恩寵を、熾(おき)を燃え立たせるようにたえず活き活きとさせる必要があります。印章(カラクテル)の力によって私たち司祭のうちにとどまる恩寵のおかげで、キリストと一体化し、聖霊においてうけた祝別をたえず新たにすることができます。それは、人間としてキリスト信者として成熟するための恩寵です。「恐れではなく、力と愛と節制との霊を私たちに与えられた。主を証明することを恥じるな。」(同1・7～8)

私たちは、叙階の秘跡の恩寵により聖務者となり、「キリストのペルソナにおいて」、また、「聖霊の御力のもとに」、恩寵にかためられ、十全な人間として行動できます。この真理には、御父から遣わされたキリストを模範として果たすべき、ゆたかな教会への奉仕の内容がよく表現されています。またその使命を果たすにあたり聖霊の御力を支えにすべきことも述べられています。この恩寵を思い出しさえすれば、自分の弱さに驚いたり、力の弱まりをゆるしたりはしないでしょう。さらに、恩寵と和解の聖務を果たすにあたり当然ながら困難に遭遇しても恐れをなすことはありません。

司牧の源動である愛徳を実行し、平和と一致を守ろうと望むならば、どうしても「生命のたまもの」が必要です。すなわち、たえ間なく日々のいけにえとして自らを捧げる、あるいはみなさん方のうち幾人かのように完全に自らを捧げるかしなければなりません。

私たちの唯一の師であるキリストとその福音に忠実を保つべきことを思いつつ、教会の信仰の教えを活き活きとまた完璧に保持するようお願いします。教会の教えは、生命を賭して守るに値する宝ですから。

ある種のイデオロギーや、ずたずたにされ党派の道具と化した福音のために生命をささげるなど、ナンセンスというほかありません。司祭は、福音と信仰の豊かな遺産を委託された身ですから、教え全体をみずからのものとし、教導職と心をひとつにして、教会の教えを忠実に伝える仕事においては第一人者でなければなりません。信仰を伝えるについては、自己の教区や国に限らず、教会全体の宣教を考えておかなければならないでしょう。

それゆえ、司祭が信仰の導き手としての役目を果たそうとすれば、師の足下(あしもと)での個人的祈りと聖務の黙想、教会の祈りによる賛美のうちに、福音を吸収しなければなりません。継続的な研修を行なう決意で福音の使信を辛抱強く研究せねばならないのです。これこそ、教義、倫理、典礼、司牧、霊性と、あらゆる分野で神学の知識を深め、記憶にとどめ、日々新たにするためにぜひとも必要な条件です。(…)

キリストがなさったと同じく、司祭の生活とは愛の奉仕にほかなりません。キリストと福音を選んだということの最高の証しは、教会の次の祈りを心から唱えることでしょう。「もう自分自身のためにではなく、私たちのためにではなく、私たちのためにお亡くなりになり、そして復活なさった御方のために生きます。」(聖体の叙唱4)　キリストのために生きるとはキリストのように生きることです。「第一の人になろうと望む者は奴隷にならねばならぬ。それと同じで人の子が来たのも、仕えられるためではなく仕えるためであり、多くの人のあがないとして自分の命を与えるためである。」(マテオ20・27～28)　キリストのお言葉はゆるぎなきものです。

みなさん方の誠実さ、清貧、優しさは、福音のために全てをささげたことの証拠となるでしょう。人々に耳を傾け、人々を受け入れ、兄弟たちを物心両面から助けるならば、仕えられるためではなく仕えるために生きていることを、示すことができるでしょう。人々に仕えるにあたって保つ清い意向、物に対する離脱の心があれば、主の召し使いとしてこの世にくだり、全てを、つまり私たちのために生命をささげてくださったあの御方の証人になることができるのです。

(一九八三・三・六)

『教皇様の声』　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月　十日発行　■定価　一部六十円送料六十円　■一年予約七百二十円送料七百二十円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替
神戸
3-72393